

保育所における子育て支援事業の意義について

守屋 ふみ子

The Purpose of A Supportive Project for Child Raising at Daycare Center

Fumiko MORIYA

キーワード 子育て支援事業 育児相談 保育所併設の意義

はじめに

現在、子どもや家庭を取り巻く地域社会は、少子化・や核家族の増加により、人間関係が希薄になっている。家庭が孤立し、母親は育児に対して相談相手もなく、育児不安や育児ストレスに陥りやすくなっている。

そこで、保育園において子育て支援事業が行われるようになった。

近隣の保育園に気軽に遊びに行けることにより、子ども達を見たり関わったり、母親同士の情報交換、専門家である相談員の話聞くことで悩んでいるのは自分だけではないことに気づき、子どもに対する母親の考え方・見方が徐々に変化し、不安が軽減されていく様子が見て取れる。

筆者は、長年保育所併設の子育て支援施設において相談員として実践してきた。現在は、「子育て支援を園全体で受け入れる」ことをモットーにしている県内の私立保育園で相談員として3年目を迎えている。「保育所併設の子育て支援事業」の本来のありかたを実践を通して追及してみた。

1. 保育所併設の意義

1) 0歳から6歳までの子がいる。

保育園に遊びに来ることで様々な年齢の子ども達と親子で関わりながら年齢ごとの発達の道筋を理解出来るようになる。

・自分の子どもと同じ年齢でも個人差が大きい

・我が子の成長を見通すことが出来る

・育児書通りにいかないこと

・子育ては焦らずにゆとりを持つ

などを学んでいる。

2) 子育ての専門家がいる。

(保育士)

専門的知識や技術を持って各年齢の発達や個人差を考慮しながら保育をしている。

子どもの自主性を尊重し、子どもを收容する姿を見て、

・極力指示命令をしない

- ・大人の都合で子どもを動かさない
 - ・子どもに自己肯定感を持たせる
- などの対応の仕方を学んでいる。

(栄養士)

母親から

- ・お菓子ばかり食べてご飯を食べない
 - ・遊び食いをする
 - ・毎日同じメニューになってしまう
- など、相談や質問がある。食事に関して、一工夫（きざみかた、味付け）をしたり、また、保育園の給食で人気のあるメニュー等のレシピを作成し配布している。

実際に家庭で作っての感想など報告があり、料理することが負担ではなくなったという声も聞かれた。

年 3 回の「育児講座」で「離乳食」を担当している。実際に作った離乳食を見て量、材料など参考にしている。

(看護師)

日常の健康管理などについての質問等に対応して直接母親に話をすることで安心する姿が見られる。

保護者の質問には

- ・歯磨きについて
- ・予防注射について

がでたので、年 2 回の「育児講座」に取り入れている。

* 育児講座では質疑応答の時間をもち日頃疑問に思っていること、悩んでいることな

ど個別相談を実施している。具体的に説明を聞くことにより納得し、安心する姿が見られる。

3) 安全な環境が整っている。(保育室・園庭)

- ・年齢に合った安全で使いやすい玩具・遊具などが配置されている。
- ・保育室や園庭など毎日安全点検を行い、安全な生活空間が整っている。

当園では、特に「園庭開放日」として位置づけをせず、毎日（月～金）子育て支援室がオープンしている時間帯であればいつでもどこでも遊ぶことができる。

2. 支援室について

1) 支援目的

子育て家庭の育児の負担を少しでも軽減できるよう、子育てをサポートする。

2) 支援の基本と具体的内容

① 子育て親子の遊び場の提供と交流の促進

- ・親子の触れ合い、利用者同士の情報交換を行う
- ・子どもとの関わり方や、わらべ歌、手遊び、パネルシアター等の伝承遊びをする
- ・「お父さんデー」を設け、父親の育児参加のきっかけづくりをする（母親のリフレッシュタイムを兼ねる）父親も子育ての楽しさが体験できるように参加者同士の交流を図る
- ・保育園の在園児との交流を図る

少子化の影響で、子ども同士、あるいは集団で遊ぶことも少なくなっている昨今、在園児との交流により人間関係が広げられる場にもなっている。

当保育園では、保育園、子育て支援室との枠を取り払い、好きな場所(部屋・園庭等)で好きな遊びができるように協力体制が整っている。

職員も在園児も来園した親子に明るく声をかけるので保護者は安心している。

例)

・ 同年齢との関わり

同年齢でのおもちゃの取り合い等のけんかで、友達との関わり方、また、折り合いのつけかたなど同年齢でなくては経験できないことなど学ぶことができる。

・ 異年齢との関わり

異年齢集団の中では、年上児と関わること一緒に遊ぶことにより、在園児も来園することを楽しみにしている。これから先の我が子の姿が予想され子育てが楽しみになる。

②育児相談

・ 話を聞いてもらいたいという母親の欲求をまず最優先に受け止め、相談にのっている。

夢中になって話しているうちに、子どもの事から母親自身の事、家族の事へと話が広がっていき、悩みの本質へ

とつながる。よく聞いて受け止めることにより安心感を持ち、来園した時と帰宅する時の表情が違うこと分かる

③地域の子育て関連情報の提供

・ ぴよぴよだよりを発行する(月1回)

ぴよぴよルームの支援内容、子育ての情報提供など行う。

・ ぴよぴよルームパンフレットを配布する

ぴよぴよルームの支援内容等掲載し、新規来園者への説明等する。

地域の保健センター等に置き、支援内容等知らせる。

・ 子育てのサークル支援は必要に応じて実施する

・ 保育園のホームページに情報を載せ、随時更新する

④子育て支援に関する講座等の実施

* 育児講座内容

・ 生活リズム・・・2回

・ 離乳食・・・3回

・ 夏の病気とけが予防・・・1回

・ 冬の病気と予防・・・1回

・ いやいやをどうのりこえる?・・・2回

・ おむつを外す時期・・・2回

・ 絵本・・・1回

子育ての悩みは時代や社会が変わっても親が抱える内容には変化がないことをアンケートや聞き取り調査等で確認した。(こどもの発達については個人差はあっても育っていく道筋は昔も今もこれからもかわらないし、地域差もない)

講座を聞いて少しでも育児に対する不安が軽減され「子育ては大変だけれども楽しい」と思えるようにつなげていくことが重要だと考える。

3) 実践内容と事例

①身長・体重測定

毎月1回第2火曜日、午後も実施。

希望があれば随時実施する。

測定の際には、手作りの身長・体重測定カードに記入して渡している。

②ふれあい遊び（月～金）

午前・・・11：45から12：00

午後・・・15：45から16：00

ふれあい遊びや手遊び、歌などを通して遊びの伝承をし、親子で遊ぶ楽しさを知らせている。

③製作遊び

毎月第3週（月～金）

身近な素材で簡単に作れ、親子で作って遊ぶ。

（事例）

育児支援室を利用している親子が製作遊びをしながら、「久しぶりに楽しい時間が過ごせて嬉しいです」など笑顔で楽しんでいる母親の姿を見ると、子育て支援とは母親の楽しめる時間を作ることも必要であることがわかる。

また、在園児や保護者が出来上がった作品を見て、作りたいと申し出て来た時は、保護者の都合のよい時間帯に支援室にて受け入れている。

④親子遊び

毎月第4週水曜日実施し、保育園の子どもと交流しながらふれあい遊び、手遊び、体操、歌など親子で遊ぶ楽しさを体験する。（園の保育士が担当）

・担当保育士

1・2歳児の担任が交代で担当している。

⑤絵本

絵本を読む楽しさを知り、親子の触れ合いを豊かにするため、小集団での読み聞かせをしている。

⑥保育園の運動会に参加

地域の保護者や保育園の子ども達との交流を図り、戸外で楽しいひと時を過ごす。

毎回、10組程参加し、子どもたちは体操、かけっこ等に、保護者は、保護者競技にそれぞれ参加している。在園児の保護者が我が子や自分にも温かい声援をおくってくれる和やかな雰囲気は、育児ストレスの軽減にもつながっていると思える。久しぶりに大声を出したり体を動かして「楽しかった!」と感想が聞かれた。

⑦その他

・授乳・おむつ交換・母子の休憩など随時受け入れている。

・保育園のお便りの掲示・・・月1回

月の予定・子育て情報・手遊び・季節の食材を使った献立・次月の予定等

*園の行事をお知らせしている。（表1参照）

保育所における子育て支援事業の意義について

表1 年間行事予定表

月	保育関係	保護者関係	子育て支援事業	保健・衛生関係
4	1（金）入園・進級の集い	22（金）保育説明会と クラス懇談会	14（木）育児講座 「生活リズム」	
5	2（月）子供の日の集い 11（水）遠足		17（火）育児講座 「離乳食」	健康診断
6		15（水）保育参観	15（水）育児講座 「夏の病気と怪我の予防」	歯科検診
7	7（木）七夕の集い		28（木）育児講座 「おむつを外す時期」	
8			1（月）育児講座 「いやいやをどう乗り越えるか」	
9	1（木）防災訓練		14（水）育児講座 「離乳食」	尿検査
10	6（木）運動会		12（水）育児講座 「生活リズム」	健康診断
11	4（金）遠足 15（火）七五三の集い	14～18（月～金）面談週間	16（水）育児講座 「冬の病気と予防 子供の怪我」	
12	21（水）お楽しみ会		7（水）育児講座 「おむつを外す時期」	
1	6（金）お正月の集い 18（水）交通安全教室		19（木）育児講座 「離乳食」	
2	3（金）節分の集い		6（月）育児講座 「いやいやをどう乗り越えるか」	
3	3（金）ひな祭りコンサート 7（火）お別れ遠足 (年長児のみ) 14（火）お別れ会 24（金）卒園式	24（金）卒園式	13（月）講座 「絵本」	

○毎月行う活動 身体測定 誕生会

○保護者に関する行事は、月のおたよりにて事前にお知らせします。尚、保育参観は、随時行っております。

予定が変更になる場合もありますので（変更時は出来るだけ早くお知らせします）ご了承ください。

- 子育て支援室（ぴよぴよルーム） ・育児相談・園庭解放（毎日） ・制作遊び（第3週月～金予約）
・親子遊び（第4週水曜日）
・お父さんデー（6月、9月、12月、3月第2週土曜日）
・子育てサークル支援（随時） ・身長、体重測定（第2火曜日）
・その他、授乳、おむつ交換、母子の休憩時も随時受け付けます。
・おたよりの発行（月1回）

4) 相談実践事例（他施設の事例も含む）

①家庭環境（父、母、Y子 当時2歳）

・初来園が、平成15年5月。

保健センターや他の保育園を利用し、他の保護者より当園の情報を知り来園した。

母は高齢出産であること、Y子ちゃんは未熟児で生まれたことなど非常に気にしていた。初回にもかかわらず、育児の不安からくる育児ストレスを堰を切ったように話し始めた。

最初の数カ月は、月に2～3回来園したが、母親とY子ちゃんの体調不良が続き1～2回の来園となった。

また、当園近くのクリニックに受診した日に、「先生、今日はお顔を見に来ました」と短時間であったが来園し挨拶を交わしただけで、笑顔で帰宅することもあった。

他園の子育て支援室の担当者が心配して、「最近Y子ちゃんが見えないが…」と市役所に伝え、市役所より当園に電話が入る。Y子ちゃんと母親の様子が心配で近況が知れたかったようだった。他機関との連携する機会が普段からあるとよいことを感じた。

昨年4月より、他の保育園に入園すると同時に転居したが、保育園をお休みしたときに来園し、来るや否や「先生、聞いてください！」と一生懸命話し始め、「今日もまた、たくさん話を聞いていただきありがとうございます。ぴよぴよルームに来るとほっとします。またきます」

と笑顔で帰宅する。

【考察】

母親一人で心配ごとを抱え、周りの人に相談できず悩んでしまうことが多い。Y子ちゃんと母親が笑顔で帰宅する姿を見ていると、「子育て支援」とは、まず、話を聞いて母親が何を伝えたいかをきちんと受け止め、気持ちに寄り添い、共感することから始まることを強く感じている。そして、一般的な考えや本に書いてあることではなく、保育の専門家である保育士の思いや考えを具体的に聞きたいと思っていることがわかる。

②家庭環境（父、母、S男 当時10カ月）

ある日、母親が血相を変えてやってきた。「先生うちのS男はこの本に（育児書持参）書いてあるのに当てはまらないのですが、おかしいのでしょうか？」と心配そうに話す。どんなところが気になるのかよく話を聞いてみると「はいはいをしない」ことだった。

「健診時に医師から何かお話がありましたか？」と聞くと「特にありませんでした！」とのことだった。子どもの発達については、個人差があること、育児書は一般的なことが書かれていること、ハイハイをしないで歩く子もいること、心配なことがあればかかりつけの医師に相談するとよいことなどお話すると安心し、笑顔が見られた。

【考察】

現在、子育てに関する情報がたくさんありすぎて不安に陥ってしまうことがわかる。

特に、育児書などに我が子を照らし合わせて一喜一憂してしまう親ごころも理解できる。

子育てに不安や悩みを抱えているのは、お母さんだけではないことを伝えると安心する。

また、「子育てに関して、相談する人はいますか？」と聞くと「いる」と答える人が多数いる。

しかし、相談する人がいるにも関わらず、なぜ相談するのか？と聞くと「大丈夫よ！うちもそうだったから！」と返ってくるという。母親は「なぜ大丈夫なのかを知りたい」という。「先生に相談すると我が子の状態を見ながら具体的にお話ししてくれるので納得します。」と安心する姿を見ると一方的に話すのではなく、母親の思いを受け止めながら、専門的なことも理解しやすいように話すことが求められていることを再確認する。また、発達等に関して他の専門機関につなげた方が良く考えたときには、情報提供をし、保育者はコーディネーター的な役割があることを再認識する。

5) 相談内容 (表2参照)

①基本的生活習慣

(食事について)

- ・離乳食の作り方、食べさせ方

- ・卒乳
- ・好き嫌い
- ・遊び食い
- ・哺乳瓶を嫌がる
- ・食べない
- ・ご飯は食べるが、おかずを食べない
- ・手づかみで食べる
- ・スプーン、お箸を持ちたがる
- ・食事のマナー
- ・おやつについて
- ・食品について

(排泄について)

- ・おむつ外れの時期
- ・おむつがぬれているのに取り替えるのを嫌がる
- ・“おまる”を使用したほうが良いか
- ・トレーニングパンツが必要か
- ・夜間起こしてトイレに連れて行ったほうが良いか
- ・便秘気味
- ・「うんち」は教えるが「おしっこ」はおしえてくれない

(睡眠について)

- ・寝るのが遅い
- ・寝起きが悪い
- ・夜泣き (数時間ごとに泣いて母親が睡眠不足)

②発達について

- ・寝返りをしない
- ・うつ伏せを嫌がる

- ・ 指しゃぶりがひどい
- ・ 探索活動について（落ち着いて遊ばない）
- ・ 歩行について
- ・ 言葉の遅れ
- ・ 身長、体重について
- ・ 人見知り、場所みしり
- ・ いやいや、だだをこねる
- ・ 自分の思いが通らないとひっくり返ってしまう
- ・ 友だちとのトラブル
- ・ 叩いたり物を投げたりする
- ・ 模倣遊び ・ 兄弟げんか
- ・ 赤ちゃん返り
- ・ テレビの見る時間や見せ方
- ・ 生活リズム
- ・ 同年齢の子どもより我が子が幼く見える

⑤その他

- ・ 地域との情報交換について
- ・ ファミリーサポートについて
- ・ 保健師訪問について
- ・ 入園について

③育児について

- ・ 子どもとの関わり方が難しい
- ・ 出産後の長男との関わりについて
- ・ しつけについて
- ・ “待つ” 事が大切なことはわかっている
ができない
- ・ 育児ストレス
- ・ 妊婦さんの安全について
- ・ 子どもができること、出来ないことなど他児と比べてしまう

④母親自身の悩み

- ・ 自分の体調について
- ・ 祖父母との関係
- ・ 家庭の心配事

保育所における子育て支援事業の意義について

*表2 相談件数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
1. 食事について	26年度	1	1	1	1		1			1	1	1		8
	27年度	1	2	3	3		2	3	1			3	6	24
	28年度	2	5	5	8	9			2	2				
2. 排泄について	26年度				1				1	1			1	4
	27年度	1	2		1			2						6
	28年度				4	1			1	1				
3. 睡眠について	26年度	1			1	1	1			1		1	1	7
	27年度								1					1
	28年度			1	2				2	1				
4. 身体・健康について	26年度		1							2			2	5
	27年度		1				1				1	1		4
	28年度			1	1	2								
5. 情緒的	26年度											1		1
	27年度	1						1						2
	28年度					3				2				
6. 社会性について	26年度					1								1
	27年度		1				1							2
	28年度		5		3	4								
7. 言葉について	26年度		1			1								2
	27年度			2	1	1		2						6
	28年度								1	1				
8. 生活習慣の自立について	26年度		1											1
	27年度			1										1
	28年度								2					
9. 発達について	26年度				4			4	3	1	2	2		16
	27年度	2	1	1		1	1		1		2		2	11
	28年度	2	1	4	5	1								
10. 育児について	26年度			1				1	1					3
	27年度		1	1						2				4
	28年度		3	2	2	1								
11. 就園について	26年度									1	1	2	5	9
	27年度	2	3		4		1	5		2		1	2	20
	28年度			2	3	1			1					
12. その他	26年度	1		1		1					1			4
	27年度	3	2	2	3		1		1	1	1	2		16
	28年度	2	3	1	1					3				

3. まとめと今後の課題

以上のように、「保育園に併設されている子育て支援室の意義」について実践の中から整理してみた。利用する保護者は、本園のように子育て支援室がオープンしている時間帯であれば自由に在園児との交流（年齢に関係なく）ができることを、まず、驚いているようである。最初は、「先生、好きなところへいって遊んでいいんですか?」「支援室から出ていいんですか?」等と言っていたが、数回来園するうちに子どもたちは目的の場所に行つて在園児と関わったりする姿が自然に見られるようになってきた。子どもたちと交流することによって、育児書等では知りえない貴重な体験をする場にもなっていることがわかる。そして、子どもを通して保育者と関わる機会も多くなり、受け入れられているという安心から表情も明るくなった。

このように、園全体で取り組む子育て支援は、通常の保育において、職員全員が子ども主体とした保育を意識的に行っていなければ実現しない。

支援室で受け入れている親子は、地域の一部である。利用したいと思ひながら躊躇している母親、家庭から出ずに一人で悩んでいる母親も多いと思う。それらをこれからどう救っていくのか具体的な方法論を考え、実行していくことが今後の課題である。

おわりに

少子化対策や核家族化により、子育て支援の必要性が叫ばれて久しい。各市町村でも力を入れて施設など整ってきて来ているが、

その量を増やすばかりでなく、質の向上の必要性を感じている。

現場にいと、子育て支援室を利用する人々から様々な声を耳にすることがある。それを聞かたび、利用者のためと言ひながら、園側の都合で受け入れていないだろうか、と思うことがある。保育に携わる者は、保育のプロとして社会の情勢に敏感になり、持てるすべての力を子育て中の母親のために注ぐべきであるという意識を持たなければならない。

地域の子育て支援センター的な役割を持つ保育園は、子育て中の家庭にとって、心強い子育て応援団になるべきである。

保育園すべてが子育て支援を日常的に行ひ、社会全体で子育て家庭を支えれば将来を担う子供たちが10年後、20年後に社会を支えてくれると信じている。

〈参考文献〉

- ・厚生労働省 保育所保育指針解説書 フレーベル館 2008年
- ・家庭支援論 橋本祐子 編著